特別インタビュー

JICA専門家・小疇浩氏に聞く

# ケニアの農業と機械化 (下)

## 小型トラなど可能性

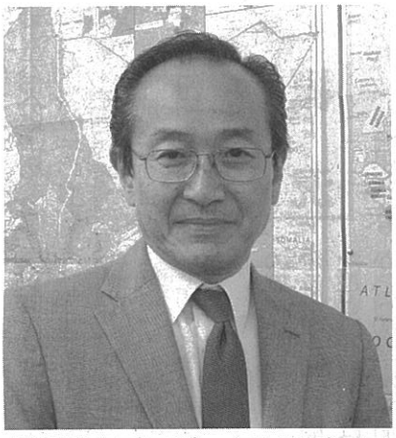
## 稲作技術支援の効果を期待

先週に続き、農業開発が続くアフリカ・ケニアの農業と機械化の話題を提供する。アフリカ・ケニアに我が国の支援で設立されたジョモケニヤッタ農工大学がある。同校で、JICAの専門家として派遣されている小疇浩（こあぜ・ひろし）氏に、今回はケニアの農業及び農業機械化などについて語ってもらった。

――ケニアの農業・農業機械化については。

小疇　残念ですが、それほど農業機械化は進んでいません。というのは、国民の75%以上が農業に従事しているような国で、実は農業というのがほとんど産業になっていない。一部の大規模農家を除いて、ほとんどが自給自足の農業をやっているという現状になります。

これはほとんどのアフリカの国で共通のことだと思いますが、まだ生活を営むために必要な産業になっていない。そうしたところで、日本と農業の概念が少し異なる状況があります。



技術協力プロジェクトでチーフアドバイザーを務める小疇氏

そんな中、農業機械化を行うということですけど、主に使われているのが畑を起こす、起耕するというところでトラクタを入れて、畑を耕してもらう。それ以上の機械を入れるというのはなかなか実現されていないのが現状です。

大規模な農業生産を行っている、例えば花産業であったり、花卉産業、くだものとか、コーヒー、紅茶をやっているような、外資の入っているようなところでは、トラクタを使った大規模な農業が行われていますが、75%の多くの人たちは、5%以下の小規模の農業をやっていますから、そこではせいぜい畑を耕すとか、水を持ってくるのに必要なポンプを使うなど、その程度の機械しか入っていないのが現状です。

そのような中で、ケニアの農業は主食がトウモロコシで、それを生産することによって主食を確保する、それから園芸作物を作るのが非常に盛んに行われていて、外貨を収得するための産業になっています。紅茶やコーヒーの生産、様々な園芸作物、花類、野菜類をヨーロッパに輸出する、花については日本にもカーネーションやバラが直接輸出されているほど、非常に重要な産業になっています。

さらに最近では、アボガドやマンゴーといったフルーツの輸出も盛んに行われていて、これらについても生産が大きく行われています。

残念ながら、あまり大きな生産が行われていないので、農業機械はそれほど使われていないのが現状ですが、大規模なところでは、その生産に適した農業機械の導入が見込まれると思います。

ほとんどが小規模の5%以下ですので、可能性があるところとしては、小規模なトラクタ。東南アジアなどで日本が、ヤンマー等が持ち込んだ歩行式のトラクタ、こういうものが可能性があるかなと感じています。

――普及しそうなものということで、先生のご専門のポストハーベスト関係ではいかがですか。

小疇　食品の加工の方は、非常に盛んに行われていて、加工食品はなかなか途上国では普及しないのですけど、一部の食品については、非常に盛んに加工されています。例えばトウモロコシを生産していますが、その生産されたトウモロコシは製粉して粉にした状態で消費するのですが、製粉業はいろいろな地方に行っても盛んです。

㊤㊦とも、ジョモケニヤッタ農工大学・農業工学科で所有しているトラクタ

ですから、ポストハーベストに関わる機材というのは可能性があると感じています。

アフリカの多くの国では「緑の革命」というのがほとんど実現されていなくて、トウモロコシの生産などでも、生産性が非常に低いままで、生産量は耕地面積を増やすことによって増えてきています。ですから、機械化することによって今後、生産性が伸びるという可能性を秘めているのは確かだと思います。

そのことを証明しているのが稲作で、日本の援助で生産の技術支援をプロジェクトでやっています。

ケニアではムエアとかアヘロという所で、灌漑を中心に米の生産強化が行われていて、米の生産性が大きく伸びています。これは灌漑を中心とした農業技術の支援が大きな効果をあげているのだと私は感じてます。FAOのデータを見ても、米の生産性は大きく伸びています。それから考えると、そういう技術支援や援助をしてあげると、生産性が伸びて、いわゆる「緑の革命」に近いようなことが実現できるのではと感じています。

――アフィカットとはどのような関わりで、その期待に関しては。

小疇　前にも申し上げましたけど、ジョモケニヤッタ農工大学には農学と工学部があり、学生が3万人ほどおります。ですから、その学生に日本の機材を見せることによって、日本の機械に慣れ親しんでくれます。

ここに来る学生というのは、ケニアの中でもトップクラスの学生が勉強していて、しかも国内で最も人気のある大学になっています。これは、日本と日本の技術に対する期待が、ケニアの若者にあるらしく、それでジョモケニヤッタ農工大学を目指して入学してくるわけです。

そんな中で学生たちが日本の機材を見ることによって、卒業して社会に出た時でも、「日本の機材にはこういうものがあるよ」というのを広めるために大変役に立つと思います。

ですから、アフィカットがここでいろいろな展示やデモンストレーションをするということで、ステークホルダーに対してダイレクトに普及をすることに有効だと思います。

何万人もいる学生がそれを見る、あるいは日本の企業の名称を聞くということになると、それだけでも大きな普及効果があるのかなと感じています。

――活動に期待されるということですね。ありがとうございました。